

# 中国文学史上の福建の文学者たち

王 炳 根

牧 野 格 子 訳

学生と先生の皆さん、こんにちは！

まず中国の著名な作家・謝冰心のことからお話します。

1936年、彼女は夫とともに日本に立ち寄りました。夫の呉文藻は中国の著名な人類社会学者で、燕京大学法学院院長でした。二人はヨーロッパに遊学するとき、日本の横浜に立ち寄り、日本の著名な学者であった鳥居龍蔵教授に会い、大学の教授たちによる歓迎のお茶会に招かれたのでした。

謝冰心はこのとき深く印象に残ったこととして、茶会に出席した日本の友人たちの顔が善意に満ちていたことを挙げています。まったく敵意の表情が見られなかったのです。だから、彼女は理解と友情の基礎の上に立った語らいと握手は隣国同士の間で最も重要な仕事であると言っています。今日、皆さんの真剣さと友情を前にして、私が講演するのはとても意義のあることだと思うのです。

福建出身の文学者について話す前に、先に中国近現代の状況について簡単に説明します。1919年5月4日、北京で国内外を震撼させる学生運動が起きました。これが有名な五四運動です。五四運動の意義は多方面に渡ります。政治上では反帝国主義、反封建主義であり、思想上では民主と科学を提唱し、文学の上では白話文による新文学が生まれました。この新文学は今日我々が言う中国近代文学およびそれに続く現代文学のことです。

この新文学の中で、重要な文学者が出現しました。三人を紹介します。

最初の一人は、魯迅（1881-1936）です。国民に与えた影響が最も大き

い文学者です。魯迅は本名を周樹人といい、字は豫才、浙江の紹興の出身です。家は没落した封建家庭でした。1902年日本に留学し、仙台で医学を学んでいましたが、後に文学に従事することになりました。文学で国民の精神を変えようと望んだのです。1909年帰国し、最初、杭州、紹興で教職についていましたが、後に政府の教育部の職に就き、北京大学、女子師範大学などでも教えました。1918年5月、最初に“魯迅”というペンネームを使って、中国近代文学史上最初の白話小説である『狂人日記』を書きました。五四運動前後、『新青年』という雑誌の仕事に携わり、新文化運動の最前線で、五四新文化運動の偉大な旗手となりました。1921年12月中篇小説『阿Q正伝』を発表しました、その作品は中国近代文学史上傑作の一つとなりました。作品は彼が創造した阿Qという人物形象を通して、深刻に中国国民の劣等的な根性を批判し、“精神勝利法”の民族民衆に与える影響を暴きました。いわゆる精神勝利法とは、現実の中でいつも他人から圧迫と侮辱を受けているにもかかわらず、精神上では永遠に勝利者であり、満足しているものであることを指します。たとえば、趙大爺は金持ちで満ち足りていますが、阿Qは、これは何でもなく、自分の祖先のほうが金持ちだったと思うのです。阿Qが人に打ちのめされたとき、彼は手で打たれたところを触りながら、息子が父親を打ったのだと思うようにします。また阿Qが断頭台に送られたとき、彼はちゃんとした円を描けなかったことを気につけ、「20年後は好い男」と唄うことも出来ませんでした。魯迅が創造した阿Qという人物形象の、民族民衆に与えた影響は非常に大きいものでした。字を知っている人なら魯迅を知っており、魯迅を知っていれば、阿Qの精神勝利法を知っています。魯迅の作品はとても多く、小説も散文もあり、特に雑文は中国で小学校から中学、大学までの教科書に載せられています。日本では、彼の人物散文である《藤野先生》と短編小説である《故郷》などが、比較的知られているかもしれません。魯迅は1936年10月19日上海で病死しました。

二人目は胡適（1891-1962）です。学术界に大きな影響を与えた人物です。胡適、本名を胡洪といい、字は適之、安徽の績溪の人です。1910年にアメリカに留学し、コーネル大学に留学したあと、コロンビア大学に入学し、デューイに師事し、その実験主義（プラグマティズム）に深い影響を受けました。1917年初め《新青年》に《文学改良趨議》を發表しました。1917年哲学博士の学位を取り、同年に帰国、北京大学教授に就任しました。《新青年》の編集に参加し、あわせて《歴史的文学觀念論》、《建設的文学革命論》などの論文を發表し、新詩集である《嘗試集》を出版し、新文化運動において非常に影響力のある人物となりました。胡適は五四時期に、白話文の提唱に力を入れました。それは文言文を用いずに創作や授業を行うということでした。それ以前の学界では白話文は屋台を引く糊売りの話す言葉で、上流の席に出せないものと思われていました。胡適は白話文を學術の殿堂に入れ、文学の言語にすることで、中国の近代文学を、白話文を以って進めるべきだと主張しました。多くの重要な作家は彼の主張と実践に従い、創作や会話を含む中国語の言語は、今日我々が話しているように、すべて白話文となりました。

胡適はかつて1938年に駐アメリカ大使となりました。1946年北京大學学長となりました。1948年には北平を離れ、アメリカに向かいました。1958年に台湾の“中央研究院院長”となりました。胡適は一生を哲学、文学、史学、古典文学といった方面に力を注ぎ、考証面で成果を上げました。彼は學術面で大きな影響を与えたのと同時に、“大胆な仮説、慎重な証明”という研究方法を提唱しました。彼の名言は“問題を多く研究し、主義をあまり語らない。”というものです。これは学术界に大きな影響を与えましたが、私の考えでは、これが与える影響はマイナス面の作用もあります。また時に概念が事実の現象よりも先んじてしまうこともあります。私個人の意見としては、比較的具体的な事実から取り掛かることを好みます。それぞれの考えから取り掛かり、そして研究し、結論と理念を生み出すので

す。これは複雑な問題ですので、今はこれ以上は申しません。胡適は1962年に台北で病死しました。

3人目は沈從文（1902-1988）です。彼は少数民族の一つである苗族の出身です。本名を沈岳煥といい、湖南の鳳凰の人です。地理上は湘西に属します。彼が若い頃、ここは極めて辺鄙で、神秘感に満ち溢れていました。彼は小学校を出ただけで、当地の土着の軍隊に従って湖南、四川、貴州の辺境を渡り歩き、沅水の流域で活動しました。1922年五四時代の思潮を受け、独りで北京にやって来て学校に上がりましたが、学が成らず、苦勞多き条件の下で創作を独学しました。彼の小説が描いているのは湘西の風俗で、極めて鮮明な郷土の特色を表しています。1934年世に問うた中編小説《辺城》は彼の小説の成熟を示しています。彼は湘西から世界に飛び出した大作家なのです。

《辺城》の物語は20世紀の初頭、苗族が雑居する辺城で始まります。まだ近代中国社会の変動に巻き込まれず、どこも静かで平和を保っていました。それは往年の湘西であり、中国全土の遙か昔の象徴でもあったのです。古い民族の原始的で純朴な性質も持ち合わせていました。物語の主人公は70歳過ぎの老船頭と、老船頭の娘の忘れ形見である15歳の翠翠です。翠翠は日に焼けた肌をし、眼は水晶のように明るくて、大自然が彼女を育て教育したとわかります。彼女は天真爛漫で、活発で、善良な心を持ち、まったく憂えたこともなく、怒ったこともありませんでした。船上で出会った見知らぬ人が彼女に関心を持つと、光り輝く眼でその見知らぬ人を見つめ、その人に害意が全くないと分かると、やっと落ち着いて水辺で遊ぶのでした。この街で棧橋を管理する順順には、二人の息子がいました。天保と雛送で、二人とも成人していました。二人は勇敢で、豪快で、誠実で、親切で、また“自然”の子でもありました。この純朴な環境下で、物語は始まります。まず弟の雛送が翠翠を好きになり、翠翠も彼を愛するようになり

ます。しかし、兄の天保も翠翠を愛してしまい、仲人を頼んで縁談を持ち込みました。翠翠はそれに答えず、彼女の祖父も彼女の意志に任せ、決めさせました。兄弟たちは代わる代わる翠翠に向かって歌を歌い、どちらが翠翠の心を動かすか争いました。

その結果、天保は難送に敵わないと分かり、やけになって舟に乗り、下っていきました。図らずも竹のさおに引っ張られて激流の中に落ちてしまい、そのまま溺死してしまいました。このときから、両家の関係は冷やかなものとなり、老船頭は孤独に陥りました。この時、弟の難送も何度も逃げ出そうとしましたが、老船頭はそれを抑えることが出来ず、ある雷雨の夜に、白い塔が崩れたとき塔とともに死んでしまいます。翠翠は一晩中泣きますが、最後には自ら渡し場を守り、難送が戻って来るのを待つことにするのです。極めて純朴で、感動的な物語です。

以上三人の有名な文学者のほかに多くの有名な文学者がいます。たとえば、茅盾、巴金、曹禺、老舍、王蒙、王安憶や莫言などです。ここでは一人一人紹介することはやめておきます。

では福建の文学者の紹介に入りましょう。中国近現代文学の中で、福建出身の文学者は重要な地位を占めてきました。これは福建が海に面していることと関係があります。福建が海外との接触と交流が比較的多いのですが、そのことが、福建の知識人の思想を活発にさせ、いつも開明的で先進的な雰囲気をもたらしていたのです。

福建の文学者の中で、私がまず紹介したいのは林語堂（1895-1976）です。彼は西洋に中国文化を紹介した第一人者です。林語堂、福建龍溪の出身。本名を和楽といい、後に玉堂と改め、後、語堂と改めました。1912年上海のセント・ジョーンズ大学に入学し、卒業後、北京の清華大学で教えました。1919年秋、ハーバード大学の文学部に留学し、1922年文学修士号

を取得しました。同年、ドイツのライプニッツ大学に転じ、言語学を学びました。1923年博士号を取得し、帰国した後、北京大学教授、北京女子師範大学の学長と英文学部主任を務めました。1924年、雑誌《語絲》の主要な執筆者の一人になりました。1926年アモイ大学の文学院長になりました。1934年《人間世》を創刊し、1935年《宇宙風》を創刊し、“自我を中心とし、鷹揚さを格調とする”小品文を提唱し、ユーモアと快樂の生活を描き出しました。1936年、アメリカ人作家パール・バックの招きを受け、アメリカで英語による創作を行いました。代表作に《吾国と吾民》、《生活の芸術》と《京華煙雲》などがあります。

林語堂はその生涯で著作は非常に豊富で、多くの重要な社会活動に参加し、同時に中国語電子タイプライターの発明家でもあり、《英漢大詞典》を編纂した言語学者でもあります。彼は魯迅の友人でしたが、後に魯迅からの批判を受けました。しかし彼は最後まで魯迅を敬愛していました。彼の生涯の中で、最も重要な貢献が二つあります。一つはユーモアを提唱したことです。軽快でユーモア溢れる態度で生活に面と向かい、同時に古人の生活の芸術を吸収すべきだと主張したのです。そうして生活を享受し、楽しみました。彼は自らを救いがたい“楽天派”と名づけました。二つ目は、西洋に中国文化を紹介したことです。彼の《吾国吾民》と《生活の芸術》は西洋の読者に向けて中国文化を紹介した重要な作品です。内容は中国の儒学、道教、庭園、絵画、書道芸術などです。《生活の芸術》という書物は、長きに渡りベストセラーとなり、版本は60種以上に渡ります。現在でも西洋の読者は中国文化紹介の重要な著作であると理解しています。彼が書いた小説の中では中国の文化が描かれています。《京華煙雲》は彼の代表作で、関西大学図書館には、この日本語訳が収められています。

もう一人紹介したい福建の文学者に、鄭振鐸（1898-1959）という人がいます。鄭振鐸は、学者型の作家、編集者、文学評論家、文学史家、考古

学者という色々な面を持っています。ペンネームは西諦、CT、郭源新などです。本籍は福建の長楽で、浙江の永嘉に生まれました。1917年北京鉄路管理学校に入学し、五四運動が勃発してからは、学生代表として社会活動に参加しました。1920年11月、沈雁冰、葉紹鈞などと文学研究会を結成し、文学研究会の機関誌《文学》週刊の編集責任者となり、《文学研究会叢書》を編集し、出版しました。1923年1月、当時中国で最も影響力のあった《小説月報》の編集主幹となり、写実主義の“人生のため”の文学を提唱し、“血と涙”の文学を主張しました。1927年、大革命が失敗したあと、パリに居住しました。1929年帰国しました。かつて生活書店の《世界文庫》を編集しました。抗日戦争が始まってからは、“上海文化界救亡協会”の結成に参加し、《救亡日報》を創刊しました。許広平などと“復社”を結成し、《魯迅全集》などを出版しました。抗日戦争勝利後は、“中国民主促進会”を結成、組織化に参加し、《民主周刊》を創刊し、全国人民が民主、平和を獲得するために戦うことを鼓吹したのです。1949年以後、文物局局長、考古研究所所長、文学研究所所長、文化部副部長、中国民間研究会副主席などを歴任しました。1958年10月18日、中国文化代表団の海外訪問の途中で、飛行機事故の犠牲となりました。主要な著作に、短編小説集《家庭の物語》、《桂公塘》、散文集《山中雜記》、専門書《文学大綱》、《挿絵本中国文学史》、《中国通俗文学史》、《中国文学論集》、《ロシア文学史略》などがあります。

謝冰心（1900-1999）について重点的に紹介します。

冰心、本名を謝婉瑩といい、本籍は福建の長楽にあり、彼女は福州に生まれました。小さい頃から父親の仕事の関係で海軍の兵營の中で育ち、男の子のような性格をはぐくみました。前後して上海、山東、福州、北京で幼年時代と少女時代を過ごしました。1918年北平女子協和大学に入学し、医学を学び始めました。1919年五四運動勃発後は、創作の道に入りました。

最初の小説《二つの家庭》を発表し、謝冰心というペンネームを使用しました。北平協和女子大学と燕京大学が合併した後、冰心は燕京大学の文本科に入りました。この時から彼女の創作はいよいよ止まるところを知らぬほどのものになりました。僅か20歳で、その名は都を席卷したのです。彼女の小説《去国》《超人》と新詩の《繁星》《春水》等は、都市に住んでいた青年たちが先を争って読んだ作品です。大学卒業後、1923年にアメリカのウェルズリー・カレッジの大学院に留学し、そこで有名な《寄小読者》を書きました。この作品は中国近代児童文学の礎となる作品です。1926年帰国後、燕京大学、清華大学で教えました。1932年から33年の間、32歳だった冰心は中国近代出版史上最初の《冰心全集》を出版しました。当時は、魯迅と胡適だけが文集、選集などを出版していました。全集を出したのは冰心がおそらく初めてでしょう。1938年北平を離れ、雲南と重慶に行き、抗日戦争の工作と創作に携わりました。第二次大戦後の1946年、中国軍事代表団に就任した夫である呉文藻教授に従い、来日しました。戦後初めて来日した中国の著名作家です。日本で、冰心は5年間暮らし、その期間東京大学で中国近代文学を教えました。彼女は創作、発表や講演を続け、マスメディアのインタビューも受け、作家や学者と座談会を持ち、青年と交流をし、日本各地を旅しました。来日して3日目、彼女は友人の招きを受け、東京から箱根に行きました。その途中で眼にしたのは、爆撃を受けたあとの日本の光景でした。至る所すべて廃墟と瓦礫で、非常に悲痛な思いをしました。それは日本軍の戦闘機によって爆撃された重慶のようでした。そこで彼女は、戦争は中国人民だけでなく、日本人にも苦難をもたらしたのだと感じました。

“戦争のことを思うと心が突き刺されそうだ。とても長い戦争の間、我々中国人はあらゆる意見を言うことができたが、日本人の中で心から平和を愛する人は意見を言うことができず、彼らはたぶんもっと苦しい思いをしたのだろう。” “中国人民はこの点を理解している。だから、彼らは頭を下



げてごめんなさいと言う必要はない。罪を償うべきは戦争を起こし、煽動した人なのだ。”彼女は多くの講演で、恨んで報復しようと思わず、人類愛で戦争を止めるべきであると主張しました。また、あなたがもし母親なら、子供に戦争は不道德なものだと教え、あなたの夫があなたに別れを告げるときは、手を挙げて止めなければならないと言ったのです。冰心本人もこのようにしました。太平洋戦争の後、彼女の異母弟がアメリカで航空を学んでいました。その弟はアメリカで飛行訓練を学んで、東京の空襲活動に参加したいと言いました。冰心は彼をたしなめて言いました。都市空襲で何千万もの人びとが我々と同じように、戦争で兄弟姉妹を失い、悲痛な思いをするのです。これはあるまじきことです、と。後に、この弟はアメリカから戻り、途中日本に立ち寄り、“東京の空襲は非常に悲惨なものである”と感じたのです。冰心は手紙の中で、彼にこう言いました。“こんなに凄惨で荒涼とした街の風景を見たら、空襲に参加することがいいことだと思いますか？”弟はこう返事しました。“お姉さんの全く言うとおりです！”

1951年冰心は日本から新たに生まれた祖国に戻り、新中国の子供と人民のために創作しました。母親、女性、作家と国家を代表して、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどの多くの国を訪問し、日本だけでも5回訪問しました。文化大革命の間、批判を受け、二度湖北の五七幹部学校に下放され、労働改造をしました。80歳になってからも、依然として創作を捨てることはしませんでした。彼女の名言は“人生は80歳から始まる”というものです。晩年の冰心はまた一つの芸術のピークを築きあげました。1999年2月28日、北京病院で逝去しました。享年99歳でした。

冰心がした最も重要な貢献は何だったのでしょうか？ 私は以下の三つだと思います。

①文体の創造。冰心は最も早い頃から白話文で創作した作家の一人です。

当時の新文学は草創期にあたり、成熟した作品は余りなく、白話文の使い方も熟練したものではありませんでした。冰心は五四時期から創作を始め、直接白話文での創作から始めたのです。彼女はしっかりとした古典の素養を持っているので、白話文を使うと、深みのある趣が現れるのです。初めは、彼女の問題小説が当時の青年に最も影響力のあるものでした。後、散文、彼女の《笑》《往事》などの代表的な散文が、現代における美文の経典的作品となりました。しかも彼女の小詩《繁星》と《春水》が当時の青年に与えた影響は特に大きく、小詩の運動までもたらしたのです。人びとは冰心をまねて、“冰心体”の詩歌を書きました。

二つの例を挙げます。

澄み切った川のほとり、  
白い霧がもうもうとしている  
それは江南の天気、  
雨がやって来た——  
私はただ知っている、紺碧の海があり、  
そして緑色の川があるのを。  
それは私の両親のふるさとだ！

子供たちよ！  
夢の中の真実、  
真実の中の夢、  
思い出す時の涙を含んだ微笑。

以上の詩からわかるように、清らかで、自然でしかも哲理に満ちています。

彼女の文章は麗しく、とてもよい古典文学の素養を引き継いでいます。だから、彼女の作品には、中国伝統の美德と文化的な味わいがあるのです。彼女の《寄小読者》は、子供たちに宛てて書いたもので、彼女がアメリカ

留学中に見たり聞いたりしたことを書いています。特に彼女が病に倒れたときの情感が子供心に満ちており、華麗で、優雅で重厚です。彼女の作品は中国青年の間で何代にもわたって影響を与えました。《寄小読者》の前に、中国には成熟した近代児童文学はありませんでした。冰心はこの種の近代的文体の創造に対し、傑出した貢献をしたのです。小説から散文、小詩、児童文学まで、これらの現代文学の中で、いつも使用される文体は、冰心が最初に作ったものです。一人の作家として、これらの方面で、基礎を打ち立てたということは、非常にすばらしいことで、偉大だとも言えるでしょう。

②文学精神。冰心が文壇にデビューしたとき、中国は近代社会の階級的な矛盾と民族的な矛盾とが日増しに先鋭化した時代でした。反抗と闘争はその時代のキーワードでした。彼女と同時代の作家はほとんど作品の中で普遍的な社会的矛盾を描き、さらに反抗と闘争を主張しました。冰心は家庭における問題と矛盾から着手しました。しかし彼女は社会の大きな矛盾を描くことができませんでした。なぜなら彼女の生活圏が家庭と学校しかなかったからです。冰心が描いた問題は家庭の関係から、親子関係、夫婦関係から始まり、社会的矛盾を鋭く指摘しています。この点は重要で明らかかなことです。さらに明らかなのは、彼女は現在の関係を壊すとか、暴力的な革命と闘争を主張したりはせず、愛をもって問題を解決しようと呼びかけたのです。その愛とはたとえば親子の愛、家庭の愛、人類の愛です。特に母性的な愛についてですが、彼女は世界で自分の母を愛さない人はいないし、母の愛は心の中の一切の苦悶と苦痛、そして世間のすべての不公平さと矛盾を解決してくれると考えていたのです。彼女の名言は「天に雨風がやって来たら、鳥は巢に逃げ込む。心の中に雨風が来たら、私は母の懐へ逃げこむだけだ。」というものです。当時、彼女のこの主張は多くの左翼作家から批判を受けました。しかし彼女は終始この考えを堅持したのです。後に“私の愛があればすべてがある”と“愛があればすべてがある”

という精神を主張したのです。冰心のこういった文学的精神は、彼女自身に属します。この精神は、中国では欠けたものです。愛を提唱しない社会など、正常な社会ではありません。一世紀の風雨を経て、冰心の文学精神は証明されたのです。社会について言えば、極めて珍しいものです。だから、中国のある重要な学者である劉再復は、もし魯迅を自らの精神の父であるとするなら、冰心は彼の精神の母であると考えたのです。このような観点は今、代表的なものとなっています。

③晩年の風格。80歳を過ぎた冰心はまた創作のピークを迎えました。これは中国に1980年代以降、改革開放の新局面が現れたからです。冰心はこの時期、多くの散文、小説を書きました。彼女の散文は短いですが緻密です。それぞれの散文は発表されると、すぐに大きな反響を呼びました。多くの新聞や雑誌が争って掲載をしようとし、評論家も大いに興味を持ちました。彼女の初期の美文は、晩年で大きく花開き、さらに深みのある感情と老練な筆致を持ったのです。当時彼女の文章は素朴で無邪気な情趣に浸りながら、熟練の域に達していました。多くの人々が何故彼女がこんな年齢で、ここまできれいな文章を書くことができるのか理解できませんでした。同時に、彼女は病気をしたあと、からだが弱くなり、歩くのも不便で、ほとんど外出しませんでした。しかし彼女は変革の真っ只中にある社会を理解していました。なぜなら彼女の家には来客が引きもきらずつめかけ、三人の子供の家族たちと毎晩一緒に夕食を食べ、さらにテレビや新聞、雑誌が彼女に多くの情報をもたらしたからです。当時彼女は教師への待遇が良くないことに不満をもち、知識が尊重されないと声高に呼びかけました。それが中国の高級官僚の注意を引きました。彼女は日本に対してはかなり理解し、いつも日本が教育を重視し、知識を尊重していることを見本とすべきだと主張したのでした。また教師の待遇を高め、基礎教育を重視し、知識を尊重すべきだとも主張したのです。大学教授の給料がタクシーの運転手のものよりも低いということはあってはならないと言ったのです。多

くの文章の中で、自らの観点を堅持して権力者に屈服してはならないと言いました。彼女のこの恐れを知らぬ精神は、人びとに尊敬されました。晩年の風格で、冰心は再び読者と名誉を獲得したのです。

福建の中国近現代文学の中には、ほかにもまだ多くの重要な作家がいます。例えば日本の徳富蘆花のような散文を書く郭風、80歳を過ぎても愛情詩を書く詩人・蔡其矯や若い女性詩人・舒蔡などがいますが、ここでは一人一人紹介できません。

みなさん、ご静聴ありがとうございました。

(2005年10月21日)